



かしこい男

長原 絵美子

何度ため息をついただろう。

ベンチに腰掛け肩を抱き、ただじっと寒さに震えていた。

『私はあなたに愛をあげます』

と、白いワンピースの少女。

『私はあなたに金をあげます』

と、黒いスーツの男。

静かに空から舞い降りた二人は、俺にどちらか一つを選べと言った。

「金」

迷わずに答えた。

『では、あなたは一生金に困ることはありません』

『しかし、あなたは一生誰からも愛されることはありません』

かまうものか。

今、俺を飢えと寒さから救ってくれるのは金だけだ。

少女は悲しそうに、男は勝ち誇ったようにほほ笑み、空へ帰っていった。

彼らが去ったあとに、一万円札が一枚落ちていた。

まだ立ち上がる気力があるのかと自分で驚いたが、俺はそれを掴み、懐にねじ込んだ。

それからネットカフェを転々とし、いつまた飢えるかわからない恐怖から、最小限の食事だけをとるとい生活が数日続いた。

金がつきる頃になると、なぜか必ず次の金が入った。

あの天使だか悪魔だかは、たしかに約束を守っているようだ。

金には困らなかったが、行く先々で嫌われた。

かまうものか。

俺はなるべく人目を避け、ひっそりと息をひそめて過ごした。

次第に手に入る金の額が大きくなる。

すでに俺は、『絶対に金に困らない』という安心感から、金の使い方は派手になっていた。

五十年がたち、再び白いワンピースの少女と黒いスーツの男が現れた。

『次は愛にしますか？』

『次も金にしますか？』

どちらか一つしかくれないなんて、ずいぶんケチだと思った。

「金」

俺は迷わずに答えた。

酸素マスクに覆われた口にはすでに歯はなく、しわしわと濁いた唇ではうまく声は出なかった。

しかし彼らはにっこりとほほ笑み、俺の手をとる。

俺が一代で築いた会社は、世界中で名を知らぬ者はいないほどの大企業へと成長した。

俺の企業はあらゆる分野に関わり、人々は知らずに俺の企業が開発したものを使う。

俺は相変わらず嫌われていたが。

かまうものか。

従業員たちは俺の悪口を言いながら、辞めることなく勤めてくれる。

それでまた金が手に入るのだ。

余った金を慈善で寄附すれば、売名だと罵られた。

かまうものか。

見知らぬ俺の金で生き延びた人がいるのだ。

彼らは生き、子を産み、育て、受け継ぐ。

俺を愛す者はいなかったから、俺は子孫を残さなかったが。

かまわない。

かまわないんだよ。

俺の生きた証を残せたのだから。

俺はきっと来世でも、金で人々を幸せにするだろう。

俺が愛していれば、それでいいじゃないか。

おわり